

「武士は食わねど高楊枝」

キリスト教的な格好良い生き方と、武士道精神に基づく格好良い生き方は、似ているところがあります。たとえば、キリスト教も武士道も、「主人」を非常に大切にします。キリスト教の主人は、もちろん主なる神様であり、主イエス・キリストのことです。武士道の主人は、殿様ですね。それぞれの主人に対して、忠誠を誓い、献身する点が、まず似ています。あとは、行き過ぎると良くないことですが、自己犠牲を厭わない点も似ています。キリスト教もイエス様のお姿に倣って、隣人のために少しでも自らの余裕を削って奉仕することを勧めていますし、武士道はまさに己の命を惜しまずに大義や主君のために捧げることを美德としています。また、「義」を求める点も共通しています。もちろん、「神の義」と「武士道の義」の内容は、同じではありませんが、主人の求める正しい生き方、つまり義なる生き方を志す姿勢は共通しています。他にも、誇り高く振る舞う一方で謙虚さを忘れないところとか、共同体を大切にし全体のために奉仕することを掲げているところとか、似通っている点があります。だからなのでしょう。江戸時代が終焉を迎え、明治政府に取って代わられて以降、幕藩体制における主従制度から「解放されてしまった」武士たちの中には、新しい主人として、神様とイエス様を受け入れる者たちがいました。日本における初期プロテスタント教会を支えた人々の中に、実は、お武家さん達がいたというのは興味深いところです。まあ、全然、血の繋がりとか、家系とか関係ないですけど、この敦賀教会にも薄っすらとサムライの心意気が漂っているかも知れない、と言うのはあり得るかも知れませんね。

ということで、今日の説教題ですね。「武士は食わねど高楊枝」。この諺の意味は、こうです。誇り高い武士というのは、たとえ空腹で困っていたとしても、さも満腹して爪楊枝を咥えているかの

ような素振りで余裕を示すものなのだ、と。見栄を張るとか、痩せ我慢するとか、まあ、そういう意味でもあるわけですが、でも、大事なのは、何があっても手放したくない気高さと誉れがあるんだ、ということですね。あとは、周りを心配させたくないという配慮と優しさも含まれてくるでしょう。状況によっては、ちょっと可哀そうな感じも有りはしますが、それでも「高潔な生き方をしたい」という願いが伴った良い意味の諺だと、私は思っています。

今日の聖書箇所は、この「武士は食わねど高楊枝」という生き方に対して、神様の祝福があることを教えています。単なる見栄っ張りじゃない、単なる強がり、痩せ我慢じゃない。尊い目的のために、重要な仕事のために、大切な人のために。苦労や不満を甘んじて受け入れつつ、愚痴があっても飲み込んで、心も身体もすり減らしながら、でも、「やらねば！」という想いで孤独にコツコツ頑張っている人のことを、神様はちゃんと見ていてくださるんだよ、と。

実は、この聖書箇所の少し前、6章1～4節にも同じようなイエス様の教えが書かれています。「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる」。最後の部分は、今日の聖書箇所と同じですね。「隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる」だから、腐らず、いじけず、いつか報われると信じて、目の前の働きに精を出し、キリストの香りを纏って明るく朗らかに行こうじゃないか、と。

この世界と、私たちの人生において、最も不幸なことの一つに「報われない」ということがあるかと思います。もちろん、貧困も、戦争も、差別も、格差も、不幸なことです。しかし、たとえそのような状況に陥っても、放り込まれても、毎日の中に「報われる」という経験があると、私たちはきっと幸せを数えて生きていくことができるでしょう。そして、その小さな幸せの先に、すべての困難が解消された未来を思い描くこともできるでしょう。「報われる」という感覚は、次への期

待に繋がっていきます。だから、「報われない」と言うのは、やっぱり不幸の始まりですね。「報われない」と感じた瞬間、それだけで次の一步を踏み出したくなくなります。「どうせ、頑張ったって意味無いし」「どうせ、誰も認めてくれないし」。そう思いながら、地道な働きや善い行いを続けて行くことは、とても大変です。別に、人に褒められたくてやっているわけじゃない、と思いつつ、でも、全く見向きをされなかったら、やっぱりつらいものです。そんな日々が続けば、「もういいかな」って切り上げてしまいたくなるのは、私たちの自然な心の働きです。

でも、そこにもし神様がいたなら、イエス様が見ておられたなら。「もうちょっと頑張ってみるか」という気持ちで、100%の出力じゃないにしろ、ちょっとだけ生まれてくるかと思います。人知れず苦勞して、人知れず疲弊して。これまでの我慢してきたことを全て吐き出して、放り出して、楽になりたい、と思うこと。結構、たびたび、少なからずあるかと思います。そんな時に、「でも、神様が見ていてくださるなら」とちょっと立ち止まって考えてみると、今まで積み上げてきた良き働きの、その行き着くところを、もう一度少しだけ期待を持って思い描くことができるかも知れない。そして、神様が見ていてくださるなら、イエス様が一緒なら、今日も笑って仕事を終えられる、そんな気持ちにもなれるかも知れない。

もちろん、自分の力量以上の働きは危険です。そして、何かを非常によく頑張ったら、同じだけ非常によく休まないといけません。私たちは、ただの人間ですから、神様と全く同じように働いたり、活躍したりすることはできません。「武士は食わねど高楊枝」。でも、そんな日ばかりじゃ、心も身体も飢えて枯渇してしまいます。だから、神様は安息日を定められました。私たちには限界があり、休息が必要であるという戒めです。

自分の力と時間の限界を弁えつつ、でも、隣人のために、神様のために、イエス様のために、何か良いことを心掛けて精進すること。偉ぶらず、見苦しい顔をせず、邁進すること。つとめて良い

ことをしているのだから、なおさら、朗らかに気高く、姿勢良く。そんな風にキリストの使者として働きを果たそうとする私たちのことを、神様は決して見逃されず、必ず良い報いを用意してください。そう私は信じています。この信仰は、私たちが行動に移す前までは、単なる机上の空論、宗教者の戯言に過ぎないかも知れません。しかし、私たちがその信仰の基づいて良い行いを続けていくなら、それは目で見て、手に触れて感じられる、この世の恵みになっていきます。私たちは神様の御言葉を、現実の働きに変える力を持っているということですね。神様は、まさに私たちを通して働かれる方なのだとと言えます。私たちこそ良き器、気高いキリストの肢でありたいと願います。

もしも私たちが断食のような苦行をするなら、それは、やっぱり神様のため、イエス様のため、そして、隣の大切な誰かのためにしたいと思います。つまり、良い目的があるということです。すぐに報われるものではないかも知れないけれど、神様の見守りを信じて、イエス様の教えを胸に、歩んで参りたいと思います。そして、そんな私たちの姿を見て、ひとりでも多くの人が、神様とイエス様に興味を持ってくれれば嬉しいですね。だから、なおのこと、見苦しい顔を控えて行きましょう。大丈夫、必ずその見苦しい顔をしたくなるほどの苦労は、神様によって報われるのだから、その日を信じて、期待に満ちた顔で行きましょう。それが、キリスト者としての務めであると私は思います。

すべてをご存じである神様に、心に秘めた祈りを捧げつつ。今週も足取り軽やかに歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちのために尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。私たちは、あなたを慕い、その御言葉に従いたいと思いつつ、日々の生活と働きとを整えています。しかし、時に報われないと感じ、あなたによって与えられた役割に心が振るわないこともあります。どうか、神様、あなたの御言葉の尊さを改めて知り、あなたの良き器として生きることの気高さと喜びを再び味わうことができますように。私たちの献身の想いが、冷たさと厳しさの支配するこの社会を、少しでも温め、慰めることができますように。そして、諦めず祈り、人知れず奉仕する私たち一人ひとりのことを、どうかあなたが見つけて、大きな祝福で満たしてください。あなたから始まり、私たちを通して実現される尊い御業が、一人でも多くの幸いとなりますように。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。